

植物活力資材使用事例

1. はじめに

異常気象の常態化や、農業現場での省力化が進むなか、より一層の栽培技術向上に取り組まれている生産者の方たちに弊社の植物活力資材をご使用いただいております。今回は発売から5年以内の商品の現地使用事例をいくつか紹介させていただきます。

2. 「ねぶとり君555」の使用事例 (表1)

北海道の北東、オホーツク海に面した地域では、夏場の冷涼な気候と豊富な日照時間を活かしてビート（甜菜）・小麦・馬鈴薯を主体とした輪作による農業生産が行われています。

この地域で「ねぶとり君555」(写真1)をビートやニンジンの栽培にご使用いただくほか、栽培管理について地域の指導的役割を担うKさんに、ニンジンでの使用方法や効果について教えていただきました。

Kさんは4月中下旬（早播き）から7月中下旬（遅播き）までの期間、数種類の品種を使い分けながら播種を行い、収穫は7月下旬から開始して11月中旬までと長期間にわたって行っています。

当社がKさんに「ねぶとり君555」の現地試験を依頼したことがきっかけで4年前からご使用いただいております。「ねぶとり君555」を散布したニンジンは大りが良く、根重が増加するとの評価をいただいております。

当社で行った社内試験では、太りは良好な結果が得られましたが、品種によっては裂根がみられるものがありました。Kさんは期間中に栽培するすべて



写真1 ねぶとり君555



写真2 培土10日目、2回目の「ねぶとり君555」散布時期をむかえたニンジン

の品種に「ねぶとり君555」を使用して、裂根などの症状は見られないという事で、使用時のポイントについてお伺いしました。

「ねぶとり君555」の使用時期は、播種後45～50日（本葉5～6枚期）を目安に行われる培土（土寄せ）作業の3日後と、それから1週間後の計2回、ニンジンの根長が決まり肥大期へと入る時期に「ねぶとり君555」を1,000倍に希釈して葉面散布する使

表1 「ねぶとり君555」 作物別おススメの使用時期と使用方法

作物名		使用時期	使用方法
ビート (甜菜)	直播	6月中旬～8月下旬 2週間おきに定期散布	500～1000倍希釈で葉面散布 (初期は500倍がお勧め)
	移植	7月上旬～8月下旬 2週間おきに定期散布	500～1000倍希釈で葉面散布
サツマイモ		定植3か月後～4か月後に1～2回	500～1000倍希釈で葉面散布
ニンジン		初期生育期～根部肥大前期の2回	1000倍希釈で葉面散布



写真3 収穫されたニンジン

い方が効果的という事です(写真2)。ポイントは、肥大期初期に「ねぶとり君555」を散布することで、生育後半の「ねぶとり君555」散布はニンジンの裂根などを助長する可能性があるため使用時期は守るよう、地域で「ねぶとり君555」を使用されている方たちにもアドバイスをしているという事でした。

「ねぶとり君555」は、銅剤やアルカリ性剤以外の農薬と混用して使用できるため、病害虫の防除と一緒に散布するケースもあるそうですが、「ねぶとり君555」の効果が確認できているので単体での使用が多いという事でした。

3. 「B作」の使用事例(表2)

北海道JA道央の管内は、恵庭市、江別市、北広島市、千歳市をエリアとする自然豊かな農業地帯と都市部との複合地域で、消費地である札幌市に隣接しているほか、新千歳空港や苫小牧港など物流にも適した地域であることから、稲作・畑作・酪農をはじめ、施設野菜や花きなど多様な農業生産が行われています。

JA道央の江別エリアで当社のホウ素供給葉面散



写真4 有限会社萩原農場の皆様

布材「B作」をご使用いただいている松本様と有限会社萩原農場様(写真4)に詳しい使用方法についてお伺いしました。

松本様はハクサイやキャベツ、レタスを生産、JAを通じて主に北海道内向けに販売を行っています。

ハクサイは5

月中旬から8月中旬にかけて定植、7月下旬から10月末まで収穫を行っており、特に初期生育と高温期の管理に気を使って栽培しているとの事です。

ハクサイの高温期のアンコ症予防を目的に、生育初期から行っているカルシウム剤の散布や病害虫防除と合わせて、「B作」(写真5)を1,000倍希釈(B作100g/水100ℓ/10a)で葉面散布しています。生育期間中に「B作」を3回から5回使用していると



写真5 B作

表2 「B作」作物別おおすすめの使用時期と使用方法

作物名	対象となる生理障害	使用時期	使用方法
ダイコン	黒芯・赤芯などの内部障害	播種25日後と、その10日後	100~300g/10a
キャベツ	チップバーンなどの内部障害	生育初期から10日おきに定期散布	100~300g/10a
ハクサイ			100~200g/10a
レタス			100g/10a
ブロッコリー	かさぶた症 花茎空洞症	生育初期から7~10日おきに定期散布	100~300g/10a
トマト	(カルシウム補給が十分な場合でも発生する) 尻腐れ症	発生が懸念される花房の着蕾期7~10日おきに定期散布	500倍に希釈して作物全体に葉面散布

※使用時期について、多少の前後は問題ありません。

※作物の生育状況に合わせて、希釈する水量を変化させてください。(基準水量: 100ℓ~300ℓ/10a)

※トマト以外で使用する場合、面積当たりの「B作」使用量を一定にしてください。



写真6 収穫をむかえたレタス

いう事でした。

「B作」は5年前から使用されていて、病虫害防除やカルシウム剤と一緒に散布できるところが使いやすいと評価いただき、「B作」を使用したハクサイは外葉が折れにくいとの感想をお持ちでした。

有限会社萩原農場様では、業務加工用途にレタスやハクサイを栽培するほか、施設でトマトやキュウリ、カラーピーマンなど多品目の栽培に取り組まれています。

レタスのチップバーン発生の予防や、ハクサイのアンコ症予防、キュウリやトマトのホウ素欠乏症防止などを目的に「B作」を使用いただいています。「B作」の使用方法は、各作物1,000倍（B作100g/水100ℓ/10a）に希釈、カルシウム剤と混用して葉面散布しており、レタスには定植1か月後を目安に散布を開始して、天候に合わせた病虫害防除と一緒に5～7日に1度のペースで散布されているという事で、環境や気象条件に合わせた栽培管理と、「B作」などの資材を上手に利用して盛夏期の出荷を行っているとの事でした。（写真6）

4. 「鬮根ゼオライト」の使用事例

栃木県はイチゴの一大産地として有名ですが、ニラの生産も盛んに行われています。昭和40年代初期からニラの栽培が始まったJAかみつがは、栃木県内の約3割のニラ生産量を誇り、全国でも有数の産地として12～5月の冬ニラ、6～11月の夏ニラと年間を通じた出荷を行っています。

JAかみつがでは、品質向上や栽培効率向上、有望品種の選定などに取り組むニラ栽培研究会が、若手生産者を中心に組織されています。

今回ニラ栽培研究会で、収穫開始前の充実した株養成を目的に「鬮根ゼオライト」（写真7）の試験を実施いただいております。使用時期は、地床やセルトレイで育苗されたニラの苗を定植する前、圃場



写真7 鬮根ゼオライト



写真8 「鬮根ゼオライト」を土壌混和した上で株養成期間中のニラ

の準備時期で、元肥施用と併せて「鬮根ゼオライト」を畝100mに10kg（1袋）を目安に土壌に混和してから定植を行い、11月までの株養成期間中の株の充実度合（特に根の量）を対象慣行区と比較して効果を確認する予定です。養成期間中の株の充実が、その後の収穫（特に12～3月の厳寒期）に影響するとも言われているので、収穫量への影響も確認したいと考えています。（写真8）

5. 最後に

今回事例を紹介させていただいた各商品の詳しい特長や使用方法については、過去の牧草と園芸記事が弊社ホームページから閲覧できますので、ご興味のある方は是非ご一読いただければ幸いです。（「ねぶとり君555」：2016年野菜特集号、「B作」：2016年野菜特集号、2017年野菜特集号、「鬮根ゼオライト」：牧草と園芸第66巻9月号、2019年野菜特集号）